

# 淫ら咲き曼殊沙華



茨城県の山間、牛久大仏を遠くに望む龍谷寺。  
修行の場としても使われる古寺でありながら多くの尼がおり、  
尼のなかでも美しいと有名なのは少年好きの淑女、川浜沙織。  
彼女は若い修行僧に目がなく、様々な誘惑を仕掛ける。

小説：プラム宝玉堂

挿絵：天破蜜柑

## ◆主な登場人物

### ・川浜沙織（29歳）

龍谷寺の尼僧。白檀の香りを纏う淑女。  
紅く、艶やかな口紅が曼珠沙華を思わせる。

### ・仲村誠（14歳）

龍谷寺に修行で訪れた若き僧。引っ込み思案な性格。  
日常的に行われる沙織からの誘惑に、日々悶々とする修行生活を送る。

### ・成瀬豪徳（57歳）

龍谷寺の住職。  
地元の名士から多額の寄進を受けている。  
修行僧を誘惑し、自分を無下にする川浜沙織のことをあまり良く思っていない。

## ■川浜沙織、誘惑編

- ・水行に、大胆にも裸で参加。
- ・祖録拝読中に行われる、口奉仕。
- ・開枕では、女の果実を見せつける誘惑。

しかし……。

誠への度重なる誘惑がばれてしまい、怒った住職は仕置き衆を招集。

仕置き衆とは、住職の息のかかった地元の名士たち。

病院院長、暴力団幹部、プロレスラー。

寺に多額の寄進をしている。

全裸での座禅にはじまり、浣腸などの折檻を受け、悶絶瀕死。

曼珠沙華。無惨、散華。

## ■川浜沙織、折檻編

・沙織は僧衣をめくりあげられ、ピンクローター&全裸座禅、警策による長時間の折檻。

- ・数珠による尻打ちが行われ、巨大浣腸に悶絶瀕死。

仕置き用、特濃グリセリン液が迫る。

- ・尻にされた強力な栓。

熱蠟を垂らされながら、長時間の我慢を強いられる。

- ・乳首に電極。

大きなガラスの便器に長時間我慢した便意を、身を揉んで排泄。



モヤモヤする日が続き、若き修行僧「仲村誠」は、何も手につかなかった。

「沙織さん……。今日もまた」

地下にある石造りの間。

冷たい氷水を桶で担ぎ、全身に浴びる水行。

ザパアッ! バッシャア!

冷水を浴びる前から、誠は小刻みに震えていた。

この修行にも、苦悶の種「川浜沙織」が同行しているからだ。



「こ……、困ります。毎日……。その……。目のやり場に……」

「誠君が、ちゃんと修行をしているかどうか。お姉さんが見てあげるのがよ」

「ああ……。だからって……。そんな格好で」

何を思っか、尼僧に相応しくないガーターベルトとハイヒールだけの姿で、甘く淫らに誘惑。

「ああ……。沙織さん、そんな」

「修行に集中なさい。すぐに気にならなくなるわ」



誠の興奮を無下に、沙織も冷水を浴びる。

ザパアッ! バッシャア!

「う……」

誠はゴクリと生唾を飲んだ。

冷たい水の滴る、熟れた、たわわな肉体が眼前にある。

乳房の先、ツンと起立した乳首からも一滴、一滴と滴り落ちる。

誠の感覚が研ぎ澄まされて、その様子すらスローモーションで瞳の奥に映し出された。

「僧侶の修行は、誘惑そのものとの戦いなものよ。住職も言っていたでしょう」

「は……。はい……。ですが……」

「何事にも惑わされず。明鏡止水の精神を培うべし」そう教えられてはいるものの、蠱惑的な沙織がいる修行での話ではない。

沙織がいる禁欲生活は過酷さを極める。

「頑張るのよ……。今日も水行を頑張ればご褒美をあげるから」

誠の耳元で、囁き。胸板をさする。

「うッ!? はあ……。はああ。ご褒美。うう……」

「今日も誠君に、大人の女を教えてあげるから」

「う……。うううう～～」

官能の火照りが冷たい肉体を包む。

肉欲の惑いが凄まじく、苦悩を搾りとるが如く呻きが漏れた。

龍谷寺にいる尼のなかでも目を惹く艶やかな尼。川浜沙織。

はじめて沙織を見た日、誠はその美しさに二度見、三度見をしてしまった。

熟れた頃合いのムチムチとした、いやらしい身体つき。

怪しく誘う目つきに、肉体から漂う白檀の香。

「さあ誠君、水行を続けて。……頑張って」

「は……。はひ……」

「今日も……。お口でしてあげる」

「う……。ううう」

誘惑にうち勝たなくてはならない身。なれど度重なる誘惑に、気もそぞろ。

まともな返答もできないくらい、やられている。

水行が終わると、祖録拝読が始まるのだが、その最中。

誠の勃起した一物は、赤い口紅を塗った沙織の口のなかにずっと含まれているのだ。

沙織は誠の全身を、優しくタオルで包み、水滴を拭き取る。上目遣いの沙織と目が合うと、興奮と緊張で全身が固くなる。

「沙織さん……。そ……。そんなところまで……」

「うふ……。ここも随分と固くなっているわ」

「うあ……！」

勃起している一物がタオルで包まれた。

盛り上がったタオルごと「はむッ」と沙織が啜える。

「はああううう！ 沙織さん……！」

「美味しそう……。はやく食べさせて……」

つづきは部屋でと石の部屋から、階段を上る。

誠の足どりの一歩、一歩が官能の火照りで痙攣を起こしている。

臨界を超えた欲情。

魅惑の水行から、勃起がずっと治まっていない。

沙織に手を添えられ、書物のある畳十畳の部屋の障子を開ける。

「さあ、次の修行ね……。今日はどの本がいいかしら」

そう言いながらも、沙織はずっと、トロンとした目で誠の下半身を見つめていた。



「んはッ、凄いわ。私のお口のなかで、ねっとり和我慢汁を垂らしてびくびくしてる」

「はあッ、はあッ、はあッ、はあッ」

「もうすぐにも、爆発してしまいそうね」

「うああッ、さ、沙織さんッ！ う、うわあああ！」

祖録拝読どころではない。

神経が下半身に集まっている。

亀頭の中から滲む我慢汁は吸われ、裏筋を伝う舌先に背筋から快感が走る。

睾丸も舌で転がされ、弄ばれる。

「沙織さん。う！ 僕ッ、僕もう、限界ですッ、んんあ、本当に……！」

睾丸が縮み、射精の前触れである痙攣か走るのを感じると、沙織はいたずらな笑みを浮かべて、舌を動かすのをやめてしまった。

「……………」

「はへあッ！ さ、沙織さん!？」

「駄目でしよう、射精しちゃ。これも修行なのだから」

「そ、そんなッ、ここで終わりだなんてッ！ はあッ、はああッ、頭がおかしくなりそうだよ！ さ、沙織さんッ！ だ、出したいッ！」

「出したいって……。私のお口に？」

「だ、出したいよッ！ 出したい！」

誠はもう、たまらず腰が動いてしまっている。

射精をしたいという根源的な本能が腰をゆさゆさと上下させている。

「面白い腰の動きね。沙織の舌にどぶどぶ出して、私に精液を飲んで欲しいの……？ 誠くん……」

誠は、頭を縦にぶんぶんと振っている。

相当に切羽詰まった様子で目が潤んでいる。

「沙織さん、お願いだよ！」

「ウフフ……。誠君の精液を沙織が飲んだら、興奮するの？」

「意地悪しないでよ！」

誠はもう、自分で自分の勃起をなくさめようと手を伸ばす。

「あ、駄目でしょう。私の目を見て、興奮を鎮めるの」

沙織は、その手を掴みオナニーを制止すると、上目遣いで迫った。

それは逆効果であることは、何より沙織が知っている。

「あ、あ、あ、沙織さんッ、う、お願い！ た、助けて！」

「助けてって……。この我慢汁まみれのおちん〇んを、私のお口で、最後まで御奉仕して貰いたいのね？」

「さ、沙織さん、ううー！ くううー！ くああー……！」

意地悪な沙織。痛いくらいに勃起してビクビクと痙攣する勃起の様子を眺めて興奮している。

射精寸前の勃起に舌先を伸ばし、チロチロとくすぐった後、耳元で囁く。

「お口ですることを、世間ではフェラチオというの。さあ、はっきりと沙織さんにフェラチオして貰いたいと言いなさい」

「あ、あ、あう、あ！ 沙織さんフェラチオして！ 沙織さんにフェラチオして貰いたいですッ！」

「そんなに、私にフェラチオしてもらいたいのね!？」

「助けて！ もう助けて！ 沙織さん！」

「そんなに大きい声を出したら、外に聞こえるわ」

唾液を亀頭に垂らし、舌を亀頭に巻いた。

沙織の誘惑は加速する。

「してッ! あああ、してッ、沙織さんッ、ぼ、ぼ、僕、も、興奮しすぎて!」

「いいわ。続きをしてあげる……」

「は、はひい」

「んちゅ、ん……」

誠の手を握ったまま、勃起を喉の奥までゆっくりと飲み込む。

「う、うわあ……っぐううう……んああ、沙織さん……いやらし過ぎます!」

「ぶはッ、そんなにびくびくしない。ほら、私が舐める場所に神経を集中して、じっくりと女の柔らかい舌を味わうのよ」

「んああ、沙織さん! あぐぐぐ……」

射精の欲求は治まらない。

誠は止め処なく先走り液を分泌し、硬いものを更に硬く勃起させる。

「誠君は若いから、弾けたいのは仕方がないけど、なるべく我慢して」

「そんな、だ……出したいよ!」

「駄目よ。修行でしょう? フェラチオの感覚だけ味わいなさい」

「沙織さん。あ、ぐ、沙織さん。そんな……。はあう!」

じゅる。じゅるる。じゅる。じゅるる。

「こ、こんなに……………! こんなに気持ちいいのに!」

じゅる。じゅるる。じゅる。じゅるる。

沙織は、誠が限界を超えているのは分かっていた。

亀頭をしゃぶるのをそのままに、左手で睾丸を揉みほぐす。

「沙織さん……………! だ、ダメえ……………イっくうう!!」

精液が激しく噴き上げそうになる。

だが、あろうことか沙織は根本を人差し指と親指押さえてしまった。

「駄目だって言っているでしょう。劣情のままに射精をすれば、肉欲に負けてしまった事になるわ。ここは勝つよ、誠くん。ウフフフ」

「あ、あが……………はぐツ!」

「いつも勝っているでしょう」

呼吸困難を起こしながらも、誠は堪える。

爆発寸前で射精を堪える。

射精を許されたことは無かった。

沙織は、快感に震える誠の姿が可愛くてたまらない。

射精できずに苦しむ姿が愛おしくてたまらない。

沙織は、射精を止められた誠に、更に彼に快感を与えようと、しゃぶり、しごき、そして、揉みしだいた。

もう一方の手は、沙織自身の股間にあり、くちゃり……………、くちゃりと、いやらしい蜜の音をたて自慰にふけている。

「ぐうう！ ぐあ、がが……。…………んあああああああ！」

「立派な僧侶になるのでしょう。誘惑に……。んべろッ、誘惑に、んはッ、打ち勝つのよ」

「こんなッ、うあッ、うおおおおお!？」

んべろ、べろッ、んちゅ、ぺろ、べろろッ!

「ほら、本に集中なさい！ 修行中でしょう」

「は、はひッ、ううあ！ な、南無阿弥陀……」

猛烈な勢いでせり上がる射精欲を抑えようと、誠は息を吐き出しながら大きく「南無阿弥陀仏」を吠えた。

柔らかく、ぬめりを帯びた舌が誘う、快楽の桃源郷。咲き乱れるのは蓮花ではなく、紅く淫らな曼珠沙華。

誠は、射精を靱やかな指で止められたまま悶絶に次ぐ悶絶。ピュッ、ピュッと我慢汁が射精のようにフェラチオをしている 沙織の顔に飛ぶが、肝心の精液が出ない。

「沙織さんッ、沙織さんもう駄目だよ！ ぼ、僕、僕、もうツツ！」

「駄目よッ、んべろッ、あむ、んちゅちゅ、れれお、ぺろッ、じゅっぼ、じゅっぼ、じゅっぼ、じゅっぼ」

「わっ！ わーッ！ で、出るッ！ 出したいッ

！ 出したいよおお！ 助けてッ！」

誠は遂に、本を放り投げ、全身を痙攣させはじめた。禁欲生活のなかで行われる、美女からの甘くも激しい口奉仕。しかし、射精することのできない苦悶には悩乱する。

「誰も助けに来ないわ！ 修行なのだから、自分に打ち勝ちなさい。射精せず、何時間も。何時間も我慢したら悟りの境地に、れろッ、んぶッ、近づけるのよ」

「あぐッ、あぐッ、あう！ あ！ あぐあ、おかしなる！ 沙織さん、僕おかしくなるッ！」

「おかしくなるの。歴史に残るような高僧は、おかしくなるくらいの荒行をしているの！」

「こんな荒行って無いよッ！ お、お願い、お願いだよッ！」

ーードンッ！

「きゃッ！」

我慢の臨界点を越えた誠は、信じられない力を出して沙織を突き飛ばした。

人間が備えている、氷層下にある潜在的な力なのだが、それほどまでに誠は追い詰められていたのだ。

「誠君……。私を突き飛ばすなんて……」

「ご、ごめんなさい。で、でも！」

「あ、駄目ッ！」

自慰をしそうになっている誠を止め、沙織は上目遣いで「いいわ。今日の修行はここまで」と言って、亀頭に軽くキスをした。

もう、それだけで全身に甘い痺れが走る誠。

「私もやりすぎたみたい。でも……。お射精はいけないから……。いつもので我慢してね」

「う……。うん……」

沙織は、肉棒を口に含むと、両目を閉じてしっかりと唇で根本まで  
啜えた。

それだけで、今にも射精をしそうに痙攣する肉棒。

沙織は嬉しそうに目を開けてから「いふでもひひは」と啜えたまま  
身体をくねらせる。

たまらず誠が「の……、飲んで!」と言うと同時。

喉奥で、黄色く塩からい苦みが弾けた。

ジョボボ……。ジョオオオ〜……。



「ん～～! んつく……。んつく。んつく。ん……」

「はあ……。はあ……。はああ。はあ。飲んで、も、もっと、飲んで、はあ、はあ」

「ごく……。こく。んん、んく、んつく、んつく」

「沙織さん、あ、あ、沙織さん! あああ～～」

～～……………!

～～……………!

「ぶはッ、美味しかったわ。また明日も飲ませて」

射精のかわりにと、沙織の胃袋に落としていった小便。これで性的興奮が治まるはずもなく。それどころか際限なくあがっていくのだ。

「さ……。沙織さん!」

誠は、たまらず沙織を押し倒そうとする。

……が、その次の瞬間「こおッ!」と怒鳴り声が畳の間に響き、ピシヤリと障子を開けた住職の憤怒の面が現れた。

「誠、座禅の時間だ! 何をしておる! はよう来んか!」

手には警策を持ち、今にも振り下ろさんばかりの威圧感がある。

「は、はひッ、た、ただいま!」

ふたりは、いそいそと乱れた僧衣を直しながら平静を装う。

「おう! 沙織も何をやっておったか!」

「修行の、お手伝いを……」

「拝読はひとりで良からう!」

「誠君の、読めない字を教えていたの」

「読めぬ字があるだと?」

「は、はい……。読めない字があつて、こうして沙織さんに教えてもらつていて……」

「ならば、本を粗末にするでない!」

フェラチオにたまらず投げ捨ててしまった本。

ページを開いたまま横たわるそれに目を向けた誠。

刹那、肩に警策の先が鋭く弾けた。

「あ、あぐッ、ごめんなさい」

「今日は厳しくするぞ、仲村誠!」

「そ……、そんな……」

「ウッフ……、誠君。またご馳走させて頂戴」

ハンカチで口元を拭い、悪戯な笑みを浮かべて、沙織は部屋を出る。

「お……おい、待て。川浜沙織、お前にも話が……」

「座禅のお時間でしょう。住職様、それじゃ」

「ぬう……。はぐらかしおって」

(川浜沙織は、いずれ仕置きにかけなければなるまい。それこそ仕置き衆を招集して、こっそりとなあ)

沙織への仕置きの想像で、股間が熱く膨張している住職。それを見て、誠は思わず「あっ」と声を洩らしてしまった。

# ためし読み 終

